

「第7回 日経 STOCK リーグに関する報告」について

大分県立情報科学高等学校教諭 衛藤 準

1. はじめに

本校は、昭和63年(1988年)に創立された大分県下唯一の情報系専門高校で、現在商業科(情報管理科・情報経営科)2~3クラス、工業科(情報電子科)3クラスの計16クラス。生徒数619名の学校であり、本年度で創立20周年を迎える。昨年度、本校在勤3年目。本コンテスト2回目の挑戦で、第7回日経STOCKリーグ(中学生・高校生・大学生の株式学習コンテスト)、参加8,193名、2,063チームの頂点となる最優秀賞を受賞することができた。本校最優勝に至るまでの取り組みについて、ご報告申し上げます。

2. 株式学習との出会い

株式学習を本格的に授業に取り入れ始め、前任校から10年目となる。平成10年に文部省主催・全商協会受託の産業教育新技術等講習で東京に派遣された折、自身初めて東京証券取引所を見学し、強烈なインパクトを受けた。自分の生徒たちに生きた経済を感じさせたい。この躍動にこそ、生きた経済活動がある。当時20代であったがこの時の衝撃こそが全ての始まりだった。

学校に戻り、すぐに翌年度の修学旅行に東京証券取引所見学を柱にした「商業研修日」設定を提案し、実現に努力した。その事前指導として、参加学年全員に出発3ヶ月前から株式の仮想売買をさせ、修学旅行の同施設訪問時の株価でチーム順位、個人順位を決めるというオリジナルのゲームを指導した。当時の生徒たちも目を輝かせながら初めての株に向き合い、テレビの中でしか見たことのなかった東京証券取引所で、自分たちの購入銘柄の株価の値動きを確認し、生の経済に触れた貴重な感動を得て、取り組みは地元新聞にも取り上げていただいた。

その後、しばらく経済系の授業を担当する機会等に恵まれず、本校赴任1年目の年度末、日経

STOCKリーグの存在を知り、翌年度3年生選択科目「国際経済」の中で、部分的に第5回日経STOCKリーグに2学期から取り組むべく、早速東京に数度足を運び情報収集と準備を行った。

まず、最初の壁は、当時(現在も)本県で統括管理する教育用ネットワークには金融や投資に関する情報にフィルタをかけられており校内では一切閲覧できないというものであった。この部分が解消されなければ、本コンテスト参加すらおぼつかない。すぐに本校ネットワーク管理者を通じ、本県ネットワーク管理部署に働きかけていただき、やっと1つのサイトだけは閲覧を確保できた。その年も生徒たちは生き生きとした取り組みをみせ、指導者としては強い手応えを感じたが小生の経験不足もあり、入賞するまでには至らなかった。

翌年1年間の内地留学で現場を離れたが、現場に戻りまず取り組んでみたかった1つが金融教育(株式学習)であった。早速、課題研究の1講座として「株式学習」を取り入れ、今回の受賞生3名を含む13名の個性豊かな生徒たちが集まった。

3. 日経STOCKリーグとは

(1) 概要

○主催：日本経済新聞社

○後援：文部科学省、金融庁、日本証券業協会、



写真1 株式学習授業風景(校内発表会)

東京証券取引所，全国公民科・社会科教育研究会，
（財）日本私学教育研究所，（財）全国商業高等学校協
会

○協 賛：株式学習ジェイティービー

中学生，高校生，大学生のための株式学習コンテ
ストとして，2000年に第1回が開催され，昨年で7
年目を迎えた。学校における経済教育の一環として，
インターネット等を活用して，株式投資を学ぶもの
で，「自主テーマによるポートフォリオ学習」およ
び「レポートコンテスト」である。

(2) コンテスト（学習）のねらい

「金融ビッグバン」と呼ばれた一連の金融制度の
大改革等により投資に対する正しい知識を持つこと
をどのような方法で学校教育での学習の場で保障し
ていくかは非常に重要な問題であるにも関わらず，
従来，日本の学校教育の場では一般に，経済教育，
特に株式投資教育はあまり重視されてこなかった。
このような背景の中，学校教育の場における投資学
習の1つのツールとして企画された，コンテスト形
式の株式投資学習プログラムである。

(3) 本コンテストで学ぶこと

大きく次の5点に集約される。

- ① 株式とは，企業の資金調達の手段の1つである
こと。
- ② 株式投資とは，企業活動の成長性や社会性に投
資することである。
- ③ 投資家の行動により，選ばれた企業に資金がよ
り多く集まることになり，一層の成長を促すこと。
- ④ 適切な株式投資を行うということは，企業の成
長を促し，ひいては雇用を創出し，結果的に税収増
加を導くなど，社会の経済的厚生を高めること。
- ⑤ 株式投資を通じて資産を適正に運用することは
経済活動における社会的責任といえること。である。

(4) 具体的学習内容

大きく次の2つの部分からなる。

- ① 自主テーマによるポートフォリオ学習
 - ・株式銘柄選択と分散投資の重要性を理解する学習
 - ※各チームに500万円分仮想株式投資権が付与さ
れ，最低10銘柄以上20銘柄まで，かつ最低購
入金額は10万円の制限の中で分散投資を行う。
- ② レポートの作成・提出
 - ア 上記ポートフォリオ学習において，なぜその
銘柄を選んだのか，
 - イ 「個人の株式投資が社会にもたらす働き」等

	年間主な概要	備考(STOCKリーグ日程他)
4月	優れた経営者に学ぶ(調査)	募集開始
5月	優れた経営者に学ぶ(発表) 政治・経済・金融の旬なテーマから	経団連 御手洗会長への祝賀 状書き
6月	〃，STOCKリーグテーマ探し 本県経済発展の調査，研究	STOCKリーグ登録 経団連 御手洗会長への祝賀 状送付
7月	株式ファンダメンタルズ分析 〃 テクニカル分析(休業中課題)	御手洗会長からのお返事
8月	為替と株式相場，個別銘柄分析	御手洗会長の講演招待
9月	業界研究，テーマ設定と役割分担	
10月	個別銘柄分析・抽出銘柄発表	500万円ポートフォリオ学習
11月	〃 銘柄確定	〃 ～30日まで
12月	レポート作成(8,000字)	役割分担を明確に
1月	レポート校正・提出 卒業発表会	1月12日提出締切日 ～審査～
2月	—	審査期間

平成18年度 年間月別の主な授業計画

STOCKリーグを通して学んだこと。

をチーム単位で，8,000字以内にまとめて，1月上
旬締切りで大会事務局に提出し審査される。

4. 第7回 STOCKリーグへの取り組み

(1) 指導計画

初めて1年間を通して株式学習に取り組めるとい
うことで，年度当初，オリジナルの年間授業計画を
明確に行った。前回の反省をふまえて，あまり政
治・経済・金融・消費者教育等の学習を大きく展開
するのではなく，STOCKリーグ9月以降の本格的
参加に向けて，軸のぶれない段階を追った学習とな
るよう指導計画を練り直した。時間軸と内容軸のバ
ランスをどのようにとるか，指導者としては，教え
たいことや学んで欲しいことは山ほどあるがこの
「金融教育」である。どうしても教師側の教えすぎ
になっていたというのが，過去の反省点であり，生
徒との感想からも1時間1時間の授業内容が濃いた
め，後半になると学びの焦点が定めづらくなるとい
う意見があった。この部分は特に留意しながら指導
計画を考えた。

上記には詳細を省略したが，実際は毎時間具体的
テーマを決め，授業時間に極力重複がないことと，
最終的なテーマ性を見失わないことに留意し，10
月からのポートフォリオ学習へスムーズに移行でき
る伏線となるよう考えながら，教材選定と準備を行
っていった。そのため，生徒には毎時間中身の濃い
授業が展開される反面，資料を含め内容が膨大なも
のとなり，途中かなりきつさを感じ，音を上げる生
徒が出る局面も何度かあったが，班別学習で互いに
支え合いながら克服していった。

(2) STOCK リーグ期間中の取り組み

今回は、13名を任意の3～5名の3チームに分けて臨んだ訳であるが、前回の経験もふまえ、テーマ分野も可能な限り絞り込み、指導効率を上げるように工夫、計画した。

また、9月初めに、1月（ゴール）までの具体的な授業予定表と評価の概要を配り、生徒たちが各種提出期限や取り組むべき作業内容を明確に示した。本コンテストの最も困難な部分は、11月末のポートフォリオ設定から、1月12日までのレポート提出日まで期間の短さだと感じていた。それを克服するためにも、チーム内での役割分担も教員側が設定を確認し、レポートのどの部分は誰が書くのかということを早い段階から把握し、進行を見守り、個に応じた指導にあたった。

(3) 校内発表会と表彰式

それでも、レポート提出は最終締切日の深夜ぎりぎりとなった。3チームとも、また指導者としても納得のいく3本のレポートを送付できた。その後、卒業までの授業はプレゼン作成、最後は校内発表会を行った。各チーム20分以内の制限時間の中で、3チームとも最後まで全員で協力した堂々の発表を行い、生徒達は全員自宅学習期間に入った。この時点では、結果の予想は全くできなかった。とにかく、13名全員が「1つの目的にゴールした!」という感慨の方がはるかに大きなものであった。

3月1日卒業式も無事終わり、2日の結果発表日となった。出勤後メールを開くとその内容は驚くべき「最優秀賞受賞」の報。テーマは「☆町おこしファン☆～最強大分の創造をめざせ!～」という、地域おこしにファンを設定することに着眼し、ユニークな調査研究をしたチームのレポートであった。すぐに卒業生たちに連絡。1週間後には、東京での栄えある表彰式の舞台上で最優秀賞のプレゼンテーションを堂々とする彼女たち3名の姿があった。更にその約2週間後には、彼女たちにとり初めての海外旅行となるニューヨークへ旅立つ成田空港にいた。

5. ニューヨーク研修旅行で感じたこと

ニューヨークでは、企業見学として、日経アメリカ社、野村証券ニューヨーク支社、トヨタ自動車北米本社を訪問し、貴重なお話を拝聴した。また、学校訪問では全米でも起業家育成や株式学習の先端に行くグリニッチ高校、学内に本格的なディーリング



写真2 表彰式&記念シンポジウムの様子

ルームを持ち最先端の金融教育にあたるニューヨーク市立大学バルチ校の2校を訪問した。そして、金融の拠点、ウォール街やNY証券取引所も訪問した。

その中で最も印象に残ったことは、「お金のもつパワー」である。大分から東京に行く時もその経済の勢いの違いを痛感することも過去たびたびあったが、あれ程の強烈なインパクトを受けたことはかつてない。非常に狭いエリアに競うようにそびえ立つ摩天楼。そして、その1つ1つのビルの内部は企業レベルに応じた強固なセキュリティシステムに守られた中で企業活動が営まれている。また、ビルの窓から見える景色もまたお金の量によって明らかに差がある。また、9.11以降、企業の中にはマンハッタンだけでなく、バックオフィスは他の場所に移し、万が一に備え、事業体そのもののバックアップ（セキュリティ）体制をとっている所も珍しくない。リスクの管理もお金の量に比例し徹底されている。

今回、国連近くの、NYヤンキース松井選手が住む超高級高層マンションそばのホテルに宿泊させていただいたが、そのマンションを毎朝見上げる度、「お金のもつ圧倒的パワー」を強く感じさせられた。また、そのような機会が1日の衣食住の日常生活の中で随所に感じるができる街である。逆に、その「格差」こそが、この街の大きな魅力であることを気づかされる。この「お金のもつ圧倒的パワー」が、よく言う「アメリカン・ドリーム」の源泉となっている気がしてならなかった。

6. 課題とまとめ

ビル・ゲイツ（米）、ウォーレン・バフェット（米）、カルロス・スリム・ヘル（メキシコ）、イングヴァル・カンブラード（スウェーデン）、ラクシュミ・ミタル（インド）

「この人たちは誰か?」, 「また, この人の仕事を
知っているか?」私は時々生徒に質問する。まず,
正確な回答は返ってこない。ちなみに2006年の世
界のトップ5の富豪たち(経済誌「Forbes」発表)
である。彼らこそ, 今の世界のビジネス社会で成功
をおさめた人間の実像である。個人で3兆円近くの
資産を持つビジネス社会の成功者たちである。ちな
みに残念ながら, 日本人はトップ100位以内にも1
人もいない。アジアで最高的人数がランクインする
国は, 未だ発展途上とされているインドであり,
100位以内に8人が名を連ねる。この視点なくして
の「Business教育」という言葉には私自身, 大き
な違和感がある。

野球選手に限らず, ある分野での成功をめざせば
憧れの選手や, その世界を代表する有名なお手本と
なる姿は普通明確に意識しているものである。日本
の高校生たちにも, 「ビジネス教育」や「起業家教
育」を行っていく上で, 明確にそれらに興味を持た
せ, きちんと認識させていくしかけが必要だと考え
る。

私が高校生に株式学習指導するにあたって, 最も
重視していることは, その視点である。日本ではま
だまだ「株をやる」という言葉とともに, 短期売買
で, キャピタルゲインを狙うこと=“株をやる”こ
とという意識が強い。しかし, 本場米国ではそのよ
うな単語はなく, あるのは①「トレーディング(売
買) ②スペキュレーション(投機) ③インベストメ
ント(投資)」という3つだそう。その中で, 特
に指導の力点を置くのは, ③のインベストメントと
しての株である。決して, “デイトレ”に代表され
るような短期売買の株価の動きで一喜一憂する投資
家づくりではない。つまり, 1回買った株はずっと
持ち続けることを前提として買う。というスタンス
に力点を置く。結果, “その信念”をどう築けば良
いのか。ということを考えさせることが非常に重要
となる。長期でかつ分散して資産をもつことにより,
金融資産のリスクは更に軽減される。その投資の基
本をきちんと指導していきたい。そうすれば, 株式
投資は決して, 投機やギャンブル, 単なるトレーデ
ィングの対象ではなくなる。事実, 戦後以降, 日米

の数ある投資対象の中で最も資産を増やしているも
のは, データ的にも株式であることは歴然としている。

近年, ネットで簡単に個人も株式売買ができるよ
うになったこともあり, トレーディング=“株をやる”
“ことであるというような認識の人も多いのが現
状ではないか。残念ながら, 日本人の株に対する認
識は未だその発展段階にあるというのが実像と捉え
た上で指導にあたっている。

日本でも最後の公開発表となった2005年度の長
者番付で, 一般的には無名の投資会社のファンドマ
ネージャーが一位になったことは記憶に新しい。そ
のような株式投資を学校教育の中で教えることを,
不易と流行という言葉で, 流行, もっと悪く言えば
“邪道”という言葉まで使う方もいるかもしれない
が, それが現在のビジネス社会の実像であることは,
しっかりと教えなければならないと強く思う。

この国が今後めざすべき方向性の大きな柱の1つ
は金融立国だと思う。そのためには, 金融教育を体
系的にかつ専門的に学校教育で教えるべきシステム
の導入や指導者の育成が急務だと強く感じる。そう
いう点では, 現状での日本の教育領域において,
「商業(Business)教育」が最も近くにあるように
思う。今後, 商業教育がもっと積極的にこの金融教
育に取り組み, その中から将来のビジネス社会での
具体的成功者をめざす生徒が一人でも多く出てくる
ことで, 真に魅力ある教育分野・内容に育っていく
と信じる。

「世界を教壇に置いた授業」, そんなスケールの中
で, 実社会を逞しく生き抜く生徒たちを一人でも多
く育成していきたいと考えている。これからも微力
ながら, ささやかな実践を積み上げていくことをめ
ざし, 今年も新たな生徒11名とともに第8回日経
STOCKリーグを楽しんでいる。

(参考文献及び参考サイト)

- ・バフェット入門 ダイアモンド社 三原淳雄 2006
- ・ピーターリンチの株の教科書 ダイアモンド社 ピー
ターリンチ 2006
- ・日経STOCKリーグ <http://manabow.com/sl/index.html>